

アモリア王朝の皇帝交替問題

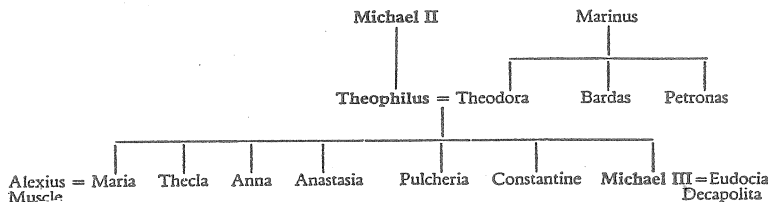
杉 村 貞 臣

序 言

コンスタンティノポリスでは八二〇年から八六七年にいたる四七年間に、ミカエル二世（在位八二〇―八二九年）、テオフィロス（在位八二九―八四二年）、ミカエル三世（八四二―八六七年）の三人の皇帝が君臨した。かれらは下に示すとおり、親・子・孫の順にならび、ここにビザンティン帝国史上一つの王朝を形成した⁽¹⁾。この王朝はミカエル二世の出身地が小アジア西部フリュギア地方のアモリオンであったことにちなみ、「アモリア王朝」あるいは「フリュギア王朝」とも呼ばれる⁽²⁾。

この時代のビザンティン帝国は、バルカン南部と小アジアとを基本的な領土とし、それにシチリア、クレタ、キプロスやエーゲ海諸島を領有した。しかしこれら島部はしばしばアラブ軍の侵略を受けた。帝国の周囲をみると、ヨーロッパ側ではブルガリア王国が帝国に隣接したほか、その西側にはフランク帝国や後ウマイヤ朝イスラム教国家が存

Amorian Dynasty 820-867



在し、さらにイングランドでも八二九年に統一国家が出現した。またアジア側ではアッバス朝イスラム教国家が栄えていた。つまり地中海周辺にはかなり広範な地域を領有する国家がならび存しており、ビザンティン帝国もその一つであった。

アモリア王朝はビザンティン帝国史上、一般に聖像破壊論争の歴史のなかで扱われた⁽⁶⁾。しかもその前半（八二〇—八四三年）は第二次聖像破壊時代⁽⁶⁾に、その後半（八四三—八六七年）は聖像最終復活の時代⁽⁶⁾にそれぞれ属したと考えられる。この王朝時代のビザンティン帝国における諸問題については、内政、外交、文化など各領域で個別的に研究されてきたが、最近ではアモリア王朝を含めて、八・九世紀のビザンティン帝国史を総合的に解明しようとする動きもみられる⁽⁶⁾。

しかし一方ではなぜこの時代にアモリア王朝が出現し消滅したのか、というきわめて素朴な疑問がおこる。アモリア王朝はビザンティン帝国史上相次いで現われた王朝のなかで、その存続期間が比較的短かい。しかもアモリア王朝の前時代に、ニケフォロス一世と後継者およびレオ五世を経た、いわば無王朝時代を帝国は経験している⁽⁶⁾。その意味で八二〇年にミカエル二世が登極したいきさつがまず問題になる。つづいてかれの子孫が相次いで皇帝に即位できたのはなぜか、またそれは何を意味するのか、さらにミカエル三世が殺され王朝が絶えたのはどのような事情によるものか、などの問題が生起する。これらの問題を考察することは、九世紀中頃のビザンティン帝国の変遷を解明するのに寄与するところもあるが、同時にビザンティン皇帝位のありかたを理解する際に、何らかの示唆を与えるとおもわれる。

註(1) Ostrogorsky, G., *History of the Byzantine State* (New Brunswick, 1969), 575.

- (2) Anastos, M. V., 'Iconoclasm and Imperial Rule 717-842' *The Cambridge Medieval History* (=CMH), IV-1. (1966), 100.
- (3) Vasiliev, A. A., *History of the Byzantine Empire 324-1453* (Madison, 1952), 234-239.
- (4) Ostrogorsky, G., op. cit., 147-209. Anastos, M. V., op. cit., CMH. IV-1. 64-104. Martin, E. J., *A History of the Iconoclastic Controversy* (London, 1930, New York, 1978), 199-221. Zakythinos, D. A., *Byzantinische Geschichte 324-1071* (Wien, 1979), 88-118. 杉村貞臣「聖像破壊論争時代における皇帝権と反抗勢力との関係の問題点」『人文論究』第三十巻第二号(一九八〇年)二〇一四〇頁。
- (5) Ostrogorsky, G., op. cit., 217-232. Zakythinos, D. A., op. cit., 119-130. Gregoire, H., 'The Amorians and Macedonians 842-1025', CMH. IV-1, 105-117.
- (6) *Studien zum 8. und 9. Jahrhundert in Byzanz, Berliner Byzantinistische Arbeiten* (=BBA), 51 (1983).
- (7) 杉村貞臣「ニケフォロス一世と後継者の皇帝交替問題」『人文論究』第三十三巻第二号(一九八三年)一一一五頁。

一 レオ五世よりミカエル二世へ(八二〇年)

八二〇年クリスマスにコンスタンティノポリスの宮廷内の礼拝堂で、レオ五世(在位八一三—八二〇年)が祝禱をあげようとした時、祭壇のかげにかくれていたミカエルによって殺された。ミカエルは当時コンスタンティノポリスの牢獄に捕えられていた。皇帝暗殺の日程は、最初クリスマスの前夜に予定されていた。しかしレオ五世が妻テオドシアの勧めで外出を取り止めた。囚人への説教者テオクティストスはこの事態を獄中のミカエルに知らせた。この時ミカエルは皇帝暗殺にあたり協力者を得た。テオクティストスの誘導でミカエルは翌日つまりクリスマスに、聖職者に変装して宮廷に入るのを許された。そしてミカエルはクリスマスの朝宮廷の礼拝堂に入り、レオ五世が現われるの

を待ち伏せた。レオ五世が礼拝堂に入ると、ミカエルは帝に襲いかかり、帝が聖体拝領台で身を守ろうとするのをさえぎり、帝を切り倒した。そのあとミカエルは、「一夜苦しみに耐えたが、朝には喜びがやって来る」という詩篇作者^{プサルミスト}の言葉を語って、王冠をかぶった⁽⁴⁾。

つまりここにビザンティン帝国皇帝としてミカエル二世（在位八二〇―八二九年）が登場したのである。したがってレオ五世よりミカエル二世への皇帝交替は篡奪であつた。なおレオ五世の遺体は、マルモラ海にある流刑地といわれたプロテ島に埋葬された。またレオ五世の息子は僧侶となつた⁽⁵⁾。ではなぜこの時期にミカエル二世による篡奪がおこつたのか、またこの篡奪は何を意味するのか。この問題を考えるにあたり、あらかじめ次の二つのことに注意しておかねばならないだろう。

まずミカエル二世の生いたちである。かれは前述のとおり、フリュギア地方のアモリオン出身といわれるが、生年とはかならずしも明らかではない。たゞどもりながらものをいったといわれる⁽⁶⁾。しかしかれは成長するにつれて軍隊に入り、とくにコンスタンティノポリス防衛軍団のなかでも、名門といわれたエクスキュビトス軍団に所属し、分隊長^{コホル}に昇進した⁽⁷⁾。そしてミカエルは、レオ五世がその前帝ミカエル一世（在位八一―八一三年）を打倒したとき、レオ五世に協力した⁽⁸⁾。ところがレオ五世が即位後、まずブルガリア軍の圧迫を退けたあと、聖像破壊の姿勢を明確にし始めると、ミカエルは帝へ反抗しついに投獄された⁽⁹⁾。つまりミカエルはビザンティン帝国中央軍の中堅幹部の道を進み、レオ五世の即位に協力したにもかかわらず、最後は帝に裏切られた形となつた。ここにミカエルのレオ五世に対する個人的怨恨が指摘されよう。

次にミカエルのレオ五世に対する怨恨がなぜ皇帝殺害にいたらしめたのだろうか。それにはレオ五世の聖像破壊政策を考えねばならない。レオ五世は聖像崇拜派の立場を採つたコンスタンティノポリス総主教ニケフォロスと対立

し、八一五年三月かれを解任した。さらに聖像崇拜派のテオドロスをコンスタンティノポリスより追放した。そして帝は新たにテオドロス・メリセノスを総主教に任命した⁽⁹⁾。新総主教は八一五年復活祭が終るとコンスタンティノポリスの聖ソフィア寺院で会議を開き、聖像破壊を決議したヒエリア宗教会議の教義を追認した⁽¹⁰⁾。この会議を足場にしてレオ五世は聖像破壊運動を実践した。しかしビザンティン帝国には、イレネの摂政時代（七八〇—七九〇年）以来およそ三十五年にわたり聖像崇拜派の勢力が聖俗両界に伸びていたため、レオ五世への支持は予想外に弱かった。それどころかレオ五世への反抗勢力が、会議終了後ますます強くなってきた。こうした世論の動きが、レオ五世に個人的怨恨をもつミカエルを、皇帝殺害へ導いたのではないだろうか。

ミカエル二世は即位後まもなくトマス⁽¹¹⁾の乱にあつたが、その最中すなわち八二一年五月十二日、息子テオフィロスを副帝に戴冠した⁽¹²⁾。またミカエル二世は八二一年に鑄造した貨幣には表裏ともにみずからの像を彫らせた⁽¹³⁾が、八二二年には貨幣の表面に自分の像を彫らせたのに対し、裏面にはテオフィロスの像を彫らせた⁽¹⁴⁾。これらのことはミカエル二世がビザンティン皇帝位を、自分とその子に、換言すれば自分の家系内に固定させようとしたのではないかと考えられる。ミカエル二世は八〇二年以来皇帝位が特定の家系に定着していない⁽¹⁵⁾のを十分知っていたため、あえてこの機会に皇帝位を自己の家系に定着させようとした。またミカエル二世は、テオフィロスの母テクラとは別に、コンスタンティノス六世（在位七八〇—七九七年）の娘エウフロシユネとも結婚した⁽¹⁶⁾。その時期はかならずしも明らかではないが、この事実はミカエル二世がビザンティン皇帝位を自己の家系に定着させるにあたり、ある種の権威的裏付けをねらったとも考えられる。その意味でミカエル二世とエウフロシユネとの結婚は、イレネの失脚（八〇二年）以来、ある意味では十八年ぶりにイサウリア王朝の血が皇室の家系のなかに再現したともいえる。

これを要するにレオ五世よりミカエル二世への皇帝位交替は、レオ五世に対するミカエル二世の個人的怨恨とレオ

五世の聖像破壊政策の行き過ぎへの反抗となっており、さらにテオフィロスの副帝戴冠やエウフロシネとの結婚により、ビザンティン皇帝位の自己家系への定着化を意図したものといえよう。

- 註(1) Martin, E. D., *A History of the Iconoclastic Controversy* (London, 1930, New York, 1978), 183.
- (2) Ibid., 183.
- (3) Vasiliev, A. A., *History of the Byzantine Empire 324-1453* (Madison, 1952), 272.
- (4) Martin, E. D., op. cit., 183.
- (5) Ostrogorsky, G., *History of the Byzantine State* (New Brunswick, 1969), 203.
- (6) Ibid., 203.
- (7) Ibid., 202.
- (8) Alexander, P. J., 'The Iconoclastic Council of St. Sophia (815) and its Definition (Horus)', *Dumbarton Oaks Papers* (= *DOP*), 7 (1953), 35-66.
- (9) Bury, J. B., 'The Identity of Thomas the Slavonian', *Byzantinische Zeitschrift* (= *BZ*), 1 (1892), 55-60. Köpstein, H., 'Zur Erhebung des Thomas', *BBz*, 51 (1983), 61-87.
- (10) Brooks, E., 'The Marriage of the Emperor Theophilus', *BZ*, 10 (1901), 542. Dikigoropoulos, A., 'The Constantinopolitan Solidi Theophilus', *DOP*, 18 (1964), 353.
- (11) Grierson, Ph., *Byzantine Coins* (London, 1982), 177, Pl. 42, No. 763.
- (12) Ibid., Pl. 42, No. 764.
- (13) 杉村真由「リタフキロス一世と後継者の皇帝交替問題」『人文論究』第三十三巻第二号(一九八三年)一一一五頁。
- (14) Brooks, E., op. cit., *BZ*, 10 (1901), 541. *CMH*, IV-1, 790-791.

二 ミカエル二世よりテオフィロスへ（八二九年）

ミカエル二世は八二九年十月死亡したが、そのあとには副帝テオフィロスが皇帝位を継いだ⁽¹⁾。ミカエル二世は前述のとおり二回結婚したが、テオフィロスは最初の妻テクラの子であった。なおミカエル二世とテクラとの間にはヘレナと称する女子がいた。またエウフロシネはミカエル二世との間には子を生んでいなかった。そのためミカエル二世死後テオフィロスは何の抵抗もなく、ビザンティン皇帝に就くことができた。

前述のとおりミカエル二世は皇帝位を自己の家系に定着させようとしたが、この意識はテオフィロスによってどのように受けられたであろうか。その回答は帝が治世中に鑄造させた貨幣のなかにみられる。テオフィロスが鑄造させた貨幣は、ディキゴロプロスによれば五種類に分類される。すなわち、(一)表面にテオフィロスと息子コンスタンティノス、裏面に父ミカエル二世の像、(二)表面にテオフィロス、裏面に息子コンスタンティノスの像、(三)表面にテオフィロスの像、裏面に CYRIBOHEHTOSODULO の文字（環状）と十字架（中央）、(四)表面にテオフィロス、妻テオドラ、娘テクラ、裏面に娘アンナとアナスタシアの像、(五)表面にテオフィロス、裏面に息子ミカエルの像をそれぞれ彫らせている⁽²⁾。そのなかでいま注意すべきことは、(一)の貨幣である。そこにはミカエル二世、テオフィロス、コンスタンティノスといった親・子・孫三代にわたる人物が彫られている。なおテオフィロスは八二一年にテオドラと結婚したといわれ、長男コンスタンティノスは八二九—三一年頃の出生と考えられる⁽³⁾。一般に皇帝が自分と後継予定者をならべて貨幣にその像を鑄造するのはよくみられるが、今回のように父帝しかも故人の像を彫らせるのは珍しい。

この親・子・孫三代人物彫刻貨幣の意味を問う前に、その鑄造年を考える必要がある。この鑄造時期についても議

論の分れるところである。たとえばウロスはこれを八三二?—八三九年?とみた⁴⁾のに続いて、ベリーは八三〇年と考えた⁵⁾。そしてベリンガーは八三三—八三七年を唱えた⁶⁾。さらにディキゴロブロスはこれら諸見解を検討した結果、この時期を八二九—八三四／五年頃と推定した⁷⁾。このように鑄造時期をめぐって見解が分れるのは、テオフィロスの長男コンスタンティノスが八三〇年代初期に早世したため、またそのあと八三九年に二男ミカエルが出生するまで女子ばかりが生残り、直系後継者がいなかったためである。それにしてもこの種の貨幣はコンスタンティノスが生存中、すなわちテオフィロスが即位して間もなく鑄造されたとみるのが妥当であろう。つまり八三〇年前後と考えられる。

するとテオフィロスは、父帝ミカエル二世が死亡すると、ただちに親・子・孫三代の人物像を貨幣に彫らせて、これをビザンティン帝国領域はもちろん、周囲の諸国にも流通させたわけである。換言すればミカエル二世の考えたビザンティン皇帝位の自己家系への定着化を、テオフィロスはいつそう鮮明に表現したといえる。テオフィロスの出生年は明らかではないが、ミカエル二世の篡奪をまのあたりに見たのをはじめ、イレネ失脚以後ビザンティン皇帝位の不安定さを見聞していたはずである。それに対し西方のフランク帝国におけるカールの戴冠と皇帝称号の使用、さらにカールからルイ一世への皇帝位継承など、その安定性を知っていた。こうした西方の皇帝位の安定性と自国の不安定性を比較した時、テオフィロスはこの際自己の即位を機会に、皇帝位の自己家系への定着化をつよく意識したと考えられる。

註(1) Ostrogorsky, G., Stein, E., 'Die Kronungsordnungen des Zeremonienbuches, Chronologische und verfassungsgeschichtliche bemerkungen', *Byzantion* (=B), 7 (1932), 231.

(2) Dikigoropoulos, A., 'The Constantinopolitan Solidi of Theophilus', *DOP*, 18 (1964), 353.

- (3) Ibid., 358.
- (4) Wroth, W., *Catalogue of the Imperial Byzantine Coins in the British Museum*, I (1908) xlii-xliii and II 418-24. in Dikigoropoulos, A., op. cit., *DOP*, 18 (1964), 357.
- (5) Dikigoropoulos, A., op. cit., *DOP*, 18 (1964), 357. n. 40. Ostrogorsky, G., Stein E., op. cit., *B*, 17 (1932), 229.
- (6) Bellinger, A. R., 'The Emperor Theophilus and the Lagbe Hoard', *Berytus*, 8 (1943/44), 106.
- (7) Dikigoropoulos, A., op. cit., *DOP*, 18 (1964), 361.

三 テオフィロスよりミカエル三世へ（八四二年）

テオフィロスは八四二年一月二〇日死亡した⁽⁴⁾。そのあとかれの次男ミカエル三世が、当時わずか四才の幼児ではあったが即位した⁽⁵⁾。もちろんミカエル三世には、母親つまりテオフィロスの未亡人が摂政となった。しかしテオフィロスは治世中後継者問題でかなり悩んだとおもわれる。とくに長男コンスタンティノスが八三四／五年に死亡し⁽⁶⁾て以来、ミカエル三世が出生した八三八年にいたる数年間にテオフィロスは若干の施策を講じた。

たとえばテオフィロスはテオドラと結婚以来、マリア、テクラ、アンナ、アナスタシアおよびプルケリアの五人の女子を得たが男子には恵まれなかった。そして六人目に生まれた男子コンスタンティノスはテオフィロスの即位後副帝にされたが、間もなく死亡した。そして皇室には女子ばかりが残った。そこでテオフィロスは、八三六年に当時十四才に達したマリアをアレクシオス・ムーゼル⁽⁷⁾と称する男性と結婚させた。アレクシオスはそのためテオフィロスより「カエサル」の称号を与えられた⁽⁸⁾。「カエサル」の称号は、皇帝に直系の後継者がいない場合、将来皇帝位継承

を予定した者におくられる⁽⁹⁾。つまりテオフィロスはコンスタンティノス亡きあとアレクシオスを自分の家系内に入れることによって、かれを皇帝位継承者に定めた。なおアレクシオスはマリアと結婚したあと、八三七年マケドニアに滞在したが、八三八年シチリア遠征を命ぜられ当地に出発した。しかし同年マリアは死亡した⁽¹⁰⁾。

この時点でテオフィロスは、皇帝位継承者としてアレクシオスがいるけれども、自分と血のつながりのある者がなくなってしまった。そこでテオフィロスは八三八年に鑄造させた貨幣には、表面に自分と妻テオドラ、次女テクラの像、裏面に三女アンナと四女アナスタシアの像をそれぞれ彫らせた（本論六二頁の貨幣分類中第四番目に相当）⁽¹¹⁾。ここには五女プルケリアの像が欠けているが、その理由は明らかでない。いずれにしてもテオフィロスはマリアの死を機会に、自分の家族を国内に周知させる意図で、こうした貨幣を流通させたと考えられる。そして同年七月後半にテオフィロスとテオドラの間に待望の男子が出生した。かれはミカエル（三世）と名付けられ、同年九月一日副帝に戴冠された⁽¹²⁾。これをもってテオフィロスに直系の後継者が現われたことになり、早速表面にテオフィロス、裏面にミカエルの像を彫った貨幣が鑄造された⁽¹³⁾。

八三八年におけるこうしたテオフィロス一家の変化により、アレクシオスの立場はにわかに悪くなった。かれはなによりも妻マリアの死を悼み、一時は修道院へ入ることも考えた。しかしテオフィロスはミカエル出生後、ただちにアレクシオスをコンスタンティノポリスへ戻し、いったん投獄したあとかれの財産を没収した。しかしコンスタンティノポリス総主教ヨハネス七世モロカルザニオス（グラマティコス）のとりなしもあって、アレクシオスは財産を返還され、また僧門に入るのを許された⁽¹⁴⁾。

このようないきさつを経てビザンティン皇帝位は、テオフィロスの死後ミカエル三世に移ることになった。しかしミカエル三世はまだ四才の幼児であったため、母親のテオドラと姉のテクラとが摂政の地位についた。またテオドラ

の弟バルダスが⁹⁸かれらの背後にあつてコンスタンティノポリスの政権を左右した。しかもミカエル三世治世初期の貨幣には、表面にテオドラの像が彫られてあり、裏面にミカエル三世とテクラの像が彫られている⁹⁹。このことはコンスタンティノポリスの政権が、実質上テオドラとバルダスの姉弟二人の掌中にあつたことを示している。

- 註(1) Ostrogorsky, G., *History of the Byzantine State* (New Brunswick, 1969), 209.
- (2) Dikigoropoulos, A., 'The Constantinopolitan Solidi of Theophilos', *DOP*. 18 (1964), 361.
- (3) Ibid., 361.
- (4) Guiland, R., 'Patrices des règnes de Théophile et de Michel III', *Revue des Etudes Sud-Est Européennes* (= *RESEE*), VIII (1970), 596-597.
- (5) Dikigoropoulos, A., op. cit., *DOP*. 18 (1964), 357.
- (6) Bury, J. B., *The Imperial Administrative System in the Ninth Century* (London, 1911, New York, 1959), 36.
- (7) Dikigoropoulos, A., op. cit., *DOP*. 18 (1964), 360-361.
- (8) Grierson, Ph., *Byzantine Coins* (London, 1982), 178, pl. 42. No. 768.
- (9) Dikigoropoulos, A., op. cit., *DOP*. 18 (1964), 361.
- (10) Grierson, Ph., op. cit., 178, Pl. 42. No. 769.
- (11) Dikigoropoulos, A., op. cit., *DOP*. 18 (1964), 354.
- (12) Guiland, R., op. cit., *RESEE*. 8 (1970), 595-596.
- (13) Grierson, Ph., op. cit., 178, Pl. 42. No. 770.

四 ミカエル三世よりバシレイオス一世へ（八六七年）

ミカエル三世は八六七年九月二三日夜から翌日朝にかけて、宮廷護衛官のバシレイオスによって殺された⁽⁴⁾。そのあとかれがバシレイオス一世として即位したので、ミカエル一世が創始したアモリア王朝は今回の篡奪をもって終った。ではバシレイオス一世による篡奪はどのような意味をもっていたのであろうか。

バシレイオスの生年については、従来議論されてきたが、ブルックスによれば八三〇—八三五年頃ではないかといわれる⁽⁵⁾。つまりミカエル三世より八—三才年長であった。またかれの出生地については確定されていない。しかし一般にはマケドニア・テマの出身といわれるが、正確にはアドリアノポリス近くのトラキア西北部といわれる⁽⁶⁾。またかれの人種がなにかであるかについても、従来ギリシア人、アルメニア人、スラヴ人などといわれてきたが、結局マケドニア在住のアルメニア系の人間であったとおもわれる⁽⁷⁾。バシレイオスの生家は貧乏であったが、かれ自身体格に恵まれていた。そこでバシレイオスは生家を去ってコンスタンティノポリスに来て、軍隊に入った。その後かれは国家祝日にミカエル三世の注目をあび、その体格を見込まれて出世し、とくに、八五九年皇帝の小アジア遠征の時にはスバサロカンディタトスの称号を得、皇帝側近の一人となった。バシレイオスは若くしてマケドニア地方の女性マリナと結婚し、彼女との間に息子コンスタンティノスを得ていたが、八六五年ミカエル三世の愛人エウドキア・インゲリナ（八五五年皇帝と離別）と再婚した⁽⁸⁾。その後バシレイオスは宮廷で勢力を伸し、ついにミカエル三世の叔父で当時カサエルの称号を保有し、宮廷で権勢をふるっていたバルダス⁽⁹⁾と対立するに至った。

こうした情勢のなかでバルダスは、クレタ島奪回のため遠征を企画し、各テマより兵士と軍船を集めていた。そし

て八六六年四月七日復活祭が終ると、クレタ遠征軍団が小アジア西部のメアンデル河口に集結した。ところがコンスタンティノポリスでは、この軍団は実はミカエル三世に反抗するために結成されたものである、という噂が流れた。しかもこの軍団の集結は、その指揮官たるバルダスの実力をいやがうえにも伸張させるものであり、バシレイオスにとつてはまことに恐脅であつた。そこでバシレイオスはバルダスの失脚を企てた。すなわちバシレイオスはバルダスの義理の息子でコンスタステイノポリスで外務長官の要職にあつたシンバティウスに対して、義父のもつかエサルの称号をかれに与えることを条件に出し、シンバティウスの支持を得、その勢いに乗つて八六六年四月二十一日バルダスを殺した。その一か月後の五月二十六日コンスタンティノポリスでは、バシレイオスがミカエル三世より副帝の称号を授与された。しかしシンバティウスには、かれが期待していたカエサルの称号は与えられなかつた。この段階でバシレイオスの政界における勢力は最大に達した⁽⁹⁾。

そこでシンバティウスはバシレイオスを裏切り者と見なし、友人のペガネスとはかりバシレイオスへの反抗を企てた。当時バシレイオスは有能な政治家ではあつたけれどもコンスタンティノポリスの軍隊では、将校や兵士の間ではきわめて人氣が悪かつた⁽¹⁰⁾。そこでミカエル三世はバシレイオスを疎じ始めた。しかも皇帝の態度があまりにも露骨に現われたので、バシレイオスは時を逃さず反抗に出た。八六七年九月二十三日金角湾のガラタ側にあるミカエル三世の居所にあてられた聖ママスで、バシレイオスは数人のアルメニア人を連れて待ち伏せた。当日ミカエル三世はワインを多量に飲み熟睡した。そして深夜バシレイオスたちはミカエル三世の寝室に忍びこみ、剣で皇帝を刺した。そしてバシレイオスは、翌二十四日コンスタンティノポリスで即位した⁽¹¹⁾。

このようにバシレイオスの皇帝殺害直前の動向をみてくると、今回の篡奪はかれのコンスタンティノポリスにおける地位保全のためにおこなわれたものであつた。すなわち無名の家に生まれたバシレイオスは、みずからの實力によ

り軍隊で出世し、ついに皇帝の先妻と結婚し、実は長男(後の皇帝)を得るにおよんで、その勢力は絶頂に達した。しかし対立者バルダスの殺害、シンパティウスへの約束不履行による人気の上降が原因で、皇帝との関係が悪化した。そこでみずからの地位に不安を感じたバシレイオスが、いつそのこと皇帝を殺害して、即位するにおよんだと考えられる。

- 註(1) Ostrogorsky, G., *History of the Byzantine State* (New Brunswick, 1969), 232.
(2) Brooks, E., 'The Age of Basil I', *BZ.* 12 (1911), 490.
(3) Ostrogorsky, G., op. cit., 232, n. 2.
(4) Vasiliev, A. A., *History of the Byzantine Empire 324-1453* (Madison, 1952), 301.
(5) Gregoire, H., 'The Amorians and Macedonians 842-1025' *CMH.* IV-1. 116-117.
(6) Bury, J. B., *The Imperial Administrative System in the Ninth Century*, (London, 1911, New York, 1959), 36.
(7) Guiland. R., 'Patrices de repnes de Théophile et de Michel III', *RESEF* 8 (1970), 595-596.
(8) Gregoire, H., op. cit., *CMH.* IV-1. 114-115.
(9) Adontz, N., 'L'âge et l'origine de l'Empereur Basile Ier', *B.* 9 (1934) 222-229.
(9) Gregoire, H., op. cit., *CMH.* IV-1. 115.

結 語

以上八二〇年から八六七年にいたるおよそ半世紀にわたり、ビザンティン帝国の皇帝位交替問題に関し、四つの事例について考察してきた。そのうち八二〇年のレオ五世からミカエル二世へ、八六七年のミカエル三世からバシレイ

オス一世へは、ともに篡奪であつたが、八二九年のミカエル二世からテオフィロスへ、八四二年のテオフィロスからミカエル三世へは、ともに皇帝位の相続であつた。もちろん篡奪・相続ともに個々の事情についてはすでに述べたとおりであるが、篡奪や相続等のもつ意味についてまとめてみよう。

まず皇帝位の篡奪であるが、八二〇年にミカエル二世がレオ五世を倒したのは、レオ五世の聖像破壊政策のいきさつと、レオ五世への個人的怨恨とが、その直接の原因であつた。しかしミカエル二世がコンスタンティノス六世の娘エウフロシネと再婚した点に注目すれば、十八年前に絶えたイサウリア王朝との連絡を維持しようとしたとも考えられる。また八六七年にバシレイオス一世がミカエル三世を倒した時も、バシレイオス一世への皇帝の態度が急変したことがその直接の原因ではあつたけれども、バシレイオスはその直前にミカエル三世の愛人エウドキア・インゲリナと再婚し、八六六年にはかの女との間にレオを得ていたことに注意すべきである。ここにもバシレイオス一世はミカエル三世とは一人の女性を介して一種のつながりをもつたといえよう。つまりミカエル二世にしてもバシレイオス一世にしても、ともに出生時には皇帝家と家系上何の關係もなかつたが、即位前後には先代の皇帝家の娘や妻などと再婚することによってある種のつながりを保っている。したがつて両回の篡奪はまったく前皇帝と無縁のところからおこつたものではない。この点皇帝交替問題を考えるにあたり注意しておかねばならない。

次に皇帝位の相続であるが、八二九年のミカエル二世からテオフィロスへの場合、すでにテオフィロスが副帝の地位についていたので何の障害もなくおこなわれた。しかもテオフィロスは即位直後鑄造させた貨幣に、ミカエル二世、テオフィロス、コンスタンティノスの親・子・孫三代の像を彫らせたが、これはテオフィロスがビザンティン皇帝位を自己の家系内に定着させようとした現われであつた。そのテオフィロスもコンスタンティノスの早世後は、皇帝位継承者の人選に悩まされ、一時は娘嬪のアレクシオス・ムーゼルを後継者に考えたが、娘マリアの死に続いて次

男ミカエル三世が生まれると、かれを副帝に任命し、早速貨幣にミカエルの像を彫らせた。この段階でテオフィロスは皇帝位の自己家系への定着化を実現したといえる。つまりコンスタンティノポリスにおけるひとつの王朝が形成されたわけで、これが後にアモリア王朝と呼ばれた。

これを要するにアモリア王朝の諸皇帝は、篡奪・相続・篡奪の過程を経て交替した。そこには篡奪と相続という相反する作用がみられたが、実は両者の間にはビザンティン皇帝位のあり方をめぐってある共通点が見出される。たとえばミカエル二世とバシレイオス一世がともに前代皇帝家の女性と結婚していたことである。ミカエル二世のエウフロシユネとの結婚はある意味では、いったん絶えたイサウリア王朝の再現とも考えられ、バシレイオス一世のエウドキア・インゲリナとの結婚はアモリア王朝の亜流継続であるとも理解できる。テオフィロスとミカエル三世の即位は正規の皇帝位継承である。したがってアモリア王朝そのものは八一〇年から八六七年にいたるまでの存在であったが、決して前後の王朝と無関係で孤立した存在ではなかった。系図上アモリア王朝はイサウリア王朝を受け継いでおり、また次のマケドニア王朝へもつらなっている。つまり皇帝交替問題からみた限りアモリア王朝はビザンティオン帝国史のながれのなかで前後の王朝との連なりをもっていた。